畜産廃棄物の発生を無くすために、リユースできるバイオ発酵土敷料の開発事業

令和６年４月３０日

信楽高原　山田牧場

事業目的	畜産廃棄物の発生を無くすために、リユースできるバイオ発酵土敷料の開発は、育成牛舎において実証実験は成功した。各方面からの取材を受け一定の評価を受けたが、売上の根源を成す搾乳牛舎での実証実験を期待され、その準備段階に入った。今後は、スマート畜産のモデル化を目指す。
事業概要	これまでの農政指導は、耕畜連携を主体としていたので、畜産農家から排出される畜産廃棄物は、堆肥化作業を経て耕種農家に販売している。ところが、耕種農家にとっては、散布後の悪臭問題が生じ、畜産農家からは供給量と需要量が余りにも違うので連携が成り立たない状況にある。こうした問題解決を果たすため、実際の需要量に合わせた 10%を悪臭のしないもので供給し、残りの 90%の分量は、リユース敷料として使用することでごみゼロを果たす。同時に、このシステムの採用により、機能的な牛舎の発想と 60%の省力化を可能にするスマート畜産構想の実証実験事業を行う。
事業効果	SBIR 制度を用いた実証実験が実現すれば、大幅に畜産運営が変わり、省力化と畜産環境の改善を行うことができる。全国で初めての取組であるが、モデル化の下で見学施設として公開しないと理解できないものである。このスマート畜産の実現後は、これまでの作業人数を 60%削減でき、畜産廃棄物の排出はゼロとなる。
今後の課題と方針	これまでの課題については、解決の目途が立ったので、行政機関の理解の下で実証実験を実行していきたい。通常はこのような実験には、牛舎や堆肥舎など設備投資を行う必要があるが、今回の実証は、現役の作業施設を利用するので効率の良いところを見せるだけでなく、営業を続けながら運営方法を革新していく工程を示す事ができる唯一の方法を採用する。

令和６年４月３０日に更新しました。